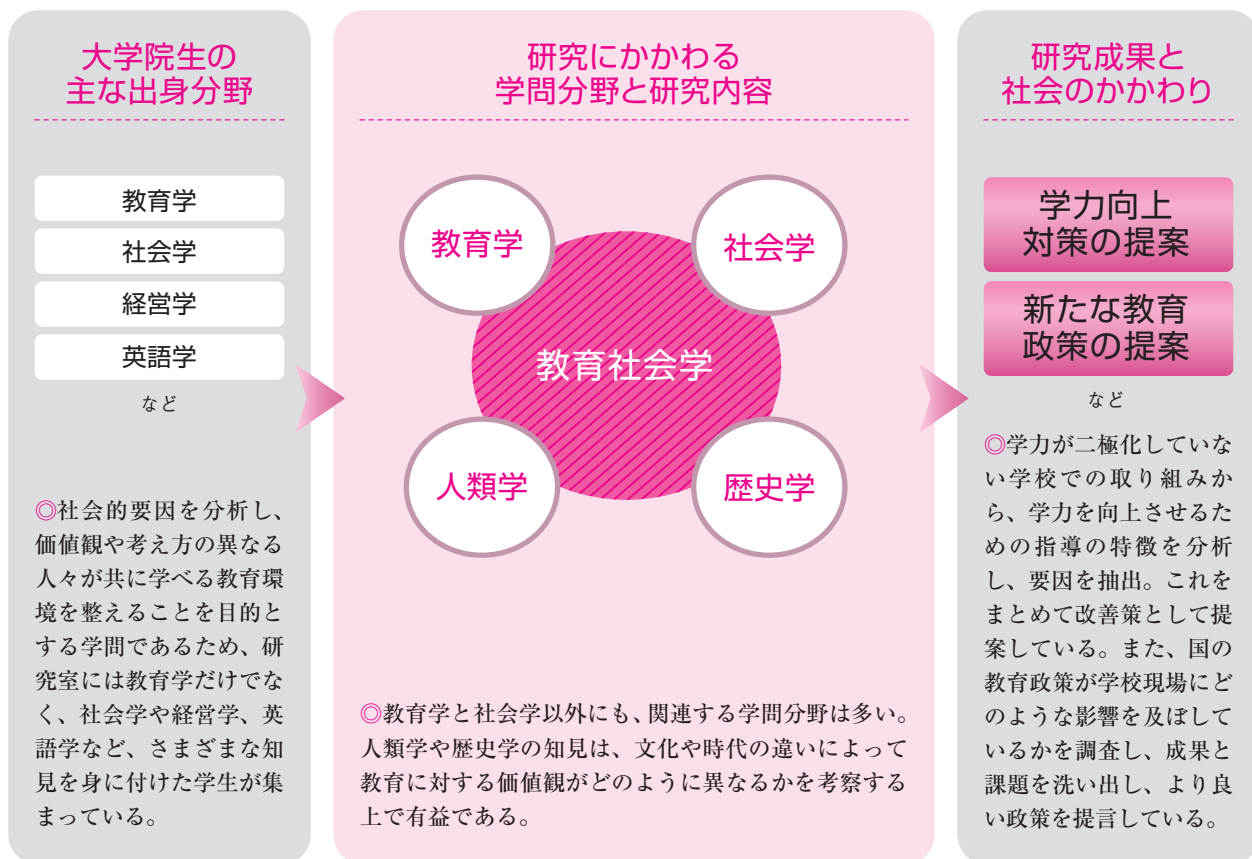


全国の学校の取り組みを分析し 子どもの学力を高める方法を追究

大阪大大学院 人間科学研究科 しみずこうきち 志水宏吉研究室

教育社会学は、経済構造や家庭環境などの社会構造から、教育が抱える問題の要因を突き止め、改善しようとする学問だ。大阪大大学院人間科学研究科の志水宏吉教授は、学力低下は成績下位層を中心に生じていると指摘し、その要因の1つに家庭の社会的な階層格差があることを挙げる。階層にかかわらず、学力を向上させるための方法を研究するために、高い学力を身に付けさせている学校の取り組みから指導の特徴を抽出している。

フローチャートで分かる志水宏吉研究室



マイノリティーの立場に共感し、社会を変えようとする意志が必要

教育社会学が求める学生像

人間への興味

マイノリティーへの共感

社会問題に対する広い視野

人間が人間に対して行う教育を研究しています。そのため、研究領域にかかわらず、教育に携わろうとする者には人間への興味があることが必須です。

教育社会学では、研究室の外に出て、学校現場や児童・生徒を直接観察しなければなりません。考え方や価値観が異なる多様な人とかかわることが多いため、教育の他領域以上に人間に対する強い関心と人間を理解しようとする姿勢が求められます。

また、階層、家庭環境、経済格差など、さまざまな社会的要因を分析しますから、社会問題に対する好奇心を持ち、探究することが欠かせません。教育の影響は生活のあらゆる場面に表れるため、特定の人の意見や考え、物事にとらわれるのではなく、社会全体を見渡せる広い視野を身に付けておいてほしいと思います。

社会制度に不備を許さない正義感も大切です。心身に障がいがある人、経済的貧困層などのマイノリティーが教育に何を期待しているのかを感じ取り、彼らの要望が実現するように、社会に働き掛けていこうとする思いが必要です。

高校生へのメッセージ

高校時代は、精神的に最も純粋に好きなことに打ち込める時期だと、私は思います。勉強でも部活動でも構いませんから、自分がこれだと思ったことをとことんやり抜いてみましょう。その中で得た「成し遂げた」という自信は、将来の道に進むにしても皆さんを支えてくれるはずですよ。



志水宏吉 教授

しみず・こうきち 大阪大学大学院人間科学研究科教授。大阪大博士課程教育リーダーディングプログラム「未来共生イノベーション」博士課程プログラム「コーディネーター」。東京大学大学院教育学研究科博士課程修了（教育学博士）。大阪教育大助教授、東京大助教授などを経て、現職。主な著書に『学校にできること―一人称の教育社会学（KADOKAWA）』、『検証 大阪の教育改革』（岩波書店）など。

研究を始めたきっかけ

家庭環境などの教育への影響力を身をもって感じた

教育社会学とは、社会のあり方が教育に及ぼす影響を考察する学問です。私は東京大に入学して間もない頃にこの学問に触れ、自分の生い立ちと現在の関係が解き明かされていくような感動を覚えました。

私の生家は、兵庫県西宮市の材木店です。両親も同居していた祖父母も、いわゆる高学歴ではないものの、知らないことを学ぼうとする知的好奇心が旺盛でした。信仰上の理由からではなく、キリスト教に興味があるからと、教会に通っていた父の姿を覚えていた祖母の姿は、特に印象に残っています。こうした家族の背中を見て育つたためか、私も自然と学校の勉強が好きになりました。

小・中学校は地元の学校でしたが、高校は岐阜県の全寮制の私立校の普通コースを選びました。男女共学であることなどに惹かれたのです。入学するとサッカー部に入部し、練習に明け暮れていました。ただ、授業

研究概要

学力低下の実態を解明し 解決策を探る

を集中して聞いていたので、成績は良好でした。半年ほど経った頃、私は英語科主任の先生に呼ばれ、進学コースに移ることを強く勧められました。進学コースは学習量が多く、部活動の時間が少なくなります。私は断ろうと思いましたが、その先生は熱心で、「志水、一緒に東京大を目指そう」と私を説得しました。それまで私は、東京大への進学など考えてもいなかったのですが、それほど期待されているのかと驚く一方、期待に応えたい、挑戦したいという気持ちで日に日に高まり、進学コースに移ることに決めました。

家庭環境や教師の期待などが、子どもの教育に大きく影響することを、私は身をもって感じました。その感覚を学問的に裏付けたいと、私は大で教育社会学を志したのでした。

私が力を入れている研究の1つは、学力格差を解消する方法を見いだすことです。柱は2つあります。

1つめは、学力低下の実態を把握

することです。1990年代の終わり頃から、学力低下がマスコミなどで話題になるようになりましたが、データによって十分に証明されているとは言えない状況でした。

そこで、私たちは、過去に行われた学力や学習状況などについての調査と、対象や設問などを同じにして改めて行った調査の結果を比較することにしました。2001年に大阪府の小・中学校十数校の小学5年生と中学2年生を対象に調査した時は、1989年の調査と対象校、学年、設問をそろえて行いました。結果を見ると、89年に比べて、成績上・中位層の得点はさほど変わりませんでした。下位層の得点は明らかに低くなっていました。つまり、全体的に学力が低下しているのではなく、二極化が進んでいたのです。

更に、01年の調査結果を分析すると、学力の二極化は家庭の「文化的階層」と密接に結び付いていることも分かりました。「文化的階層」が上位の家庭ほど子どもの学力が高くなる傾向にあったのです。階層によって学力に格差が生じているのは、日本だけではありません。アメリカ

やイギリスなどでもそれが社会問題になり、行政も解決に向けて動いています。そうした海外の政策にも注目し、成果と課題を検証しています。

一方、私たちの調査からは、保護者の「文化的階層」にかかわらず、学力の二極化を克服している学校があることも見えてきました。教育社会学では、そうした学校を「効果のある学校」と呼んでいます。学力がどのように低下しているのかを確かめてこそ、それを解決するための方法を検討することが出来るのです。

研究の2つめの柱は、この「効果のある学校」を全国から見付け、そのでの取り組みを他校に広めることです。ただ、地域性や学校文化などが異なりますから、ある学校で効果のあった取り組みを別の学校で行っても、うまくいくとは限りません。地域や学校の特性に適する形に変えて取り組めるように、効果が上がる要因を抽出しています。

研究からは、どの「効果のある学校」にも子どもと教師との強固な信頼関係が共通して見られることが分かっています。学力低下に悩む学校では、ここに目を向けて改善を図る

ことも、学力を向上させる鍵になると考えています。

研究の成果と展望

他校への参考として「効果のある学校」の指導の特徴を抽出

「効果のある学校」の取り組みを、他校で応用しやすくしようと、私たちは08年に「スクールバスモデル」を発表しました。「気持ち

のそろった教職員集団」「戦略的に柔軟な学校運営」など、大阪府内の「効果のある学校」に共通する指導の特徴を8つ抽出し、解説した図表です。私が校内研究などに招かれた時は、これを示しながら講演をしています。

日本の教育の現状では、残念ながら、保護者が属する社会階層による不利益を子どもが被ることがあります。学校現場を訪問し、先生方と話す度に、「全ての子どもに確かな学力をもたらすという、公教育の目的を果たしたい」という熱意を感じます。教育社会学を研究する私には、この願いを実現させる使命があります。今後も研究を続け、1日も早くそれを果たしたいと考えています。

用語解説

① 文化的階層

文化面に着目して分類した、保護者の属する社会階層。ここでは、01年の調査に設けた「家の人はテレビでニュース番組を見る」「家の人が手作りのお菓子を作ってくれる」「小さいとき、家の人に絵本を読んでもらった」「家の人に博物館や美術館に連れて行ってもらったことがある」「家にはコンピューターがある」の5つの質問項目への回答を、それぞれ主成分分析によって、「上位」「中位」「下位」の3グループに分けたものを指す。なお、社会階層は文化的階層の他に、職業階層、収入階層、学歴階層などさまざまな分類が可能である。

〈ヤンチャ〉な生徒を受け入れる社会を目指して



知念 渉さん

ちねん・あゆむ 大阪大学大学院人間科学研究科博士
後期課程3年。沖縄県立知念高校卒業。

Q なぜこの分野に進んだのですか

A 大学に入学した頃は小学校の教師を目指していましたが、2年生の時、研究者になろうと思うようになりました。学校で流行する服装、人望を集める生徒の気質などについて考察する、生徒文化という研究領域が教育社会学にあることを知ったのがきっかけです。

高校時代、おしゃれ好きが昂じて、繰り返し服装指導を受けていた私は、大学入学後も、「なぜ自分は

しつかり制服が着られなかったのか」と考え続けていました。この疑問に対する答えを見付けられるかもしれないと思ひ、教育社会学の研究を志したのです。

Q 志水先生の研究室での研究内容を教えてください

A 〈ヤンチャ〉な生徒、いわゆる不良少年の文化について研究しています。取り組み始めたのは、5年前、修士課程1年の時です。当時、大阪府内の高校でフィールドワークを行っていた私は、ある高校で問題行動をとる20人ほどの男子生徒のグループに出会いました。それ以来、彼らへのインタビュー調査を続けています。全員が社会に出た今でも、定期的に顔を合わせて近況を聞いています。

高校中退か卒業かを問わず、彼らの多くはホストや建設現場での作業職に就きました。家庭が経済的に貧しく、腰を据えた就職活動がしにくいことなどから、先輩や友だちのつてを頼って職を探した結果です。

修士論文では、彼らの学校経験や将来展望について分析しました。彼らが意外にも学校の教師を信頼して

いることや、自らの置かれた環境と将来展望をすり合わせていく過程について論じました。

高校を中退あるいは卒業後、彼らはどのような職業に就き、どのような家族を形成していくのか。博士論文では、これを主要なテーマにする予定です。〈ヤンチャ〉な生徒の文化やライフスタイルが形成される要因が見えてくれば、彼らが違和感なく過ごせる学校や社会をつくることにもつながると期待しています。

Q 高校生へのメッセージをお願いします

A 大学に入学してからの私は、高校時代に比べて、ずっと勉強が好きになりました。自分の興味があるテーマの研究に取り組

み、それを充実させるために学ぶという意識を持てるようになったからだと思います。研究に必要な英語の文献を思うように読めない時などは、「高校でもっとしつかり勉強しておけばよかった」と後悔します。

私のような思いをしないよう、皆さんには、今、学校で学んでいることをしつかり身に付けてほしいと思います。ただ、私が言うだけでは将来とのつながりが見えにくく、意欲が高まらないかもしれません。そこで、提案があります。興味のある学問について、研究者が書いた一般向けの本を読んでみませんか。研究にどのような知識が求められるかを知ることができ、学ぶ目的をつくるのにきつと役立つと思います。

私の高校時代

現在の研究に役立っているバンド活動での経験

●高校に入学して間もなく、私は友だち4人でバンド活動を始めました。ライブハウスでは、他校のバンドとも交流しました。初対面の人と演奏の順番や持ち時間を交渉して決めることが多く、他者の要望に応えながら、自分の要望も通していくためには何が必要かを学びました。

2年生の終わりまではバンド活動に没頭していましたが、子どもが好きな私は、将来は教師になりたいと思っていました。そして、3年生の5月に大学進学を決めたのです。それ以降は受験勉強が生活の中心になり、夏以降は毎日10時間以上、机に向かいました。バンド活動に打ち込んだ経験が生かされたのでしょうか。自分でも驚くほど勉強に集中できました。

学校外の活動への理解や、物事に集中して取り組む姿勢など、現在の研究に役立つ多くのものが得られた3年間だったと思います。